



本の泉社 1818円+税

# 『自選随筆集成 余韻嫋嫋』

著・嵐圭史

前進座で長く中心スターとして活躍された嵐圭史さんがこれまで書かれた沢山(たくさん)のエッセーの中から特に自選された作品で編まれている。圭史さんの人生が飾り気のない筆致で語られていて誠に面白い。

圭史さんとは出会いから20年余りになる。私の店は南座の前にあり、そのお正月公演の観賞会を毎年持たせていただいたからだ。

圭史さんが役業の上で大切にされていることが理解できる。まず第1はご家族のことだ。圭史さんが前進座に入団されたのは1959年というが、駆け出しの頃、両親、兄夫婦と同居しておられたが、母親以外は皆役者だったという演劇一家なのだ。父親は五代目嵐芳三郎である。その母親も公演の時には昼・夜1人2食分の弁当、合わせて8食分を毎日作り続け、支えて

## エッセーでたどる名優の生き方

くれたという。「私は母の愛情を、父から引き継いでいる」と語っておられる。

第2は、食べること、食べる食糧を生産する「農」へのこだわりである。文化の原点は生産活動と切り離せないもので、すべての基(もと)は土にあるというのだ。圭史さんは2017年に前進座を「離座」されたが、最後の公演は、新田次郎原作の「怒る富士」だった。農民救済に生涯をささげた伊奈半左衛門の話である。公演を拝見したが、「農」にこだわる圭史さんに相応しい素晴らしい舞台だった。舞台の出演回数は1万ステーツをはるかに超えるというから驚く。

舞台以外で圭史さんのお仕事で特筆したいのは『平家物語』全編の完全朗読CDを刊行されたことである。『平家物語』は琵琶法師の音声で語り継がれた歴史的叙事詩である。それが圭史さんのしみじみとした朗読で現代によみがえる。

圭史さんは、その後自分で『圭史企画』を立ち上げて、役者を続けておられる。コロナ禍の中で、大変ご苦労されたが、21年には真山青果の「玄朴と長英」、22年には瀬戸内寂聴の「世阿弥」を上演された。

今年(2023年)は山本周五郎の「赤ひげ」に挑まれるという。前進座時代の十八番の一つだが、新しい視点で取り組まれる舞台が楽しみである。(加藤幹雄・レストランキエフ会長)